

# Katherine Mansfieldにおける パケハのイギリス志向

—— “A Woman at the Store” と “Millie” を中心に ——

三 神 和 子

## I はじめに

ニュージーランド出身のキャサリン・マンスフィールドはイギリスにわたり作家になったとき、生まれ故郷のニュージーランドをよく作品の舞台に選んだ。彼女がよく描いたニュージーランドは“Prelude,” “The Garden Party,” “At the Bay,” “The Doll’s House”などの作品においてBurnell家やSheridan家の家庭生活が展開する牧歌的なニュージーランドの風景である。しかし、マンスフィールドが描くニュージーランドは牧歌的な風景ばかりではない。とくに1912年4月に*Rhythm*<sup>1)</sup>に掲載された“A Woman at the Store”と1913年6月に*Blue Review*<sup>2)</sup>に掲載された“Millie”には暑くて土埃の舞う厳しい自然のニュージーランドが描かれている。なぜ、彼女は厳しい自然のニュージーランドを描いたのであろう。

たしかに、これらの作品に描かれている厳しい自然は、それぞれの作品の最後に主人公が秘めていることが暴露される野蛮性にふさわしい。しかし自然の厳しさが主人公の蛮行（“A Woman at the Store”は夫殺し、“Millie”は人間狩りへの加担）の直接の原因となっているわけではない。かといって、蛮行にふさわしい風景というだけで自然の厳しさを描いたわけでもないであろう。

では、厳しい自然を何故マンスフィールドは描いているのか。この二つの作品を厳しい自然環境という設定に着目しながら、マンスフィールドが何を伝えたかったのかを考え、どうして厳しい自然を描いたのかを解いてみたい。

## II “A Woman at the Store”

まず、“A Woman at the Store”から見てみる<sup>3)</sup>。この物語は主人公（語り手）と二人の男性Hin<sup>4)</sup>とJoeがニュージーランドの奥地を馬に乗って旅をし、4年ほど前にJoeが泊まったことがあるという食糧雑貨店に泊まる話である。三人は暑さと埃の中を、Hinの話では、パケハ<sup>5)</sup>の気前のいい亭主と美人の妻がやっている食料雑貨店を楽しみに馬の歩みを進めていくが、その店に着いてみると、話とは別人のような醜い容姿の女と小さな女の子と汚い犬がいるだけで、亭主はいなかった。その女によれば、亭主は羊毛刈りに行っていて留守だという。しかし、その晩、Joeが女の相手をしているすきに、女の子の描いた絵によって、主人公とHinは女が亭主をライフ

ル銃で撃ち殺し、穴を掘って死体を埋めたことを知る。翌朝、二人をあとから追いかけることにしたJoeを残し、主人公とHinは何も言わずにその店を立ち去っていく。確かに、ここには夫殺しという野蛮な行為があり、*Rhythm*への彼女のデビューを飾るのに相応しい残忍な事柄を扱う作品となっている。<sup>6)</sup>

では、夫殺しという蛮行へと彼女を駆り立てたものは何か。それこそがマンスフィールドがこの作品で描きたかったことであろう。一見すれば、店の女の亭主への不満が夫殺しの動機だと判るが、果たして亭主への不満だけが動機なのだろうか。確かにこの作品はフェミニズムの視点から読めるが、作品全体を考えると、すなわち、どうしてマンスフィールドが舞台設定にニュージーランドの奥地を選んだのかを考えると、この作品にはフェミニズムを訴えた作品として片付けるわけにはいかないものがある。店の女の夫殺しの動機を考察することで、この作品に託したマンスフィールドのメッセージを考えてみる。

確かに店の女は亭主への不満を抱えており、その不満を女は自ら次のように説明する。

It's six years since I was married, and four miscarriages. I says to 'in, I says, what do you think I'm doin' up 'ere? I you was back at the Coast, I'd 'ave you lynched for child murder. Over and over I tells 'im -you've broken my spirit and spoiled my looks, and wot for - that's wot I'm driving at. (Mansfield 273)<sup>7)</sup>

結婚してこの僻地に来てからというもの、女は六年の間に4回流産し、生まれた子供に授乳したくても乳が出ず、生まれた子供も優良児とは言えない。そして何よりも彼女を困らせるのは、亭主が彼女に店を任せて、彼女を何日間も置き去りにすること、マオリ族か浮浪者しか見かけない人淋しい僻地に彼女を置き去りにし、子供以外に誰もいない孤独の状態にすることである。鉄道が敷かれる以前は、この奥地にも店に乗合馬車が二週間に一度通ってきていて、店も繁盛し、今のように寂しい場所ではなかった。しかしその馬車が来なくなった後、今ではその場所はマオリ族か浮浪者しか見かけない、ほとんど誰も来ない場所になった。そこに彼女は置き去りにされる。亭主は気まぐれにひょっこり帰ってくると、彼女に性の相手をさせる。そしてまた亭主は何日も、何週間も家を空けるのである。

"Trouble with me is," she leaned across the table, "he left me too much alone. When the coach stopped coming, sometimes he'd go away days, sometimes he'd go away weeks, and leave me ter look after the store. Back 'e'd come -pleased as Punch. "Oh, 'allo," 'e'd say. (Mansfield 274)

この間、彼女の容貌は衰え、黄色い髪をした「蠟人形のようにきれいな顔をした」女は(272)、申し訳程度に黄色い髪を残し、前歯の欠けた醜い顔の女に、そして「エプロンの下には棒切れとを針金しかないのかと思える」姿に変わっている(270)。惨憺たる経験をした彼女の口から「いったい何のため」と言う疑問が思わず湧き出て、彼女の頭の中に響き渡る。

すなわち、結婚して人淋しくなったこの僻地に暮らすことによって、彼女は女性としての誇りをことごとくに破壊されてきた。元来、彼女は自分が女性であることを誇りにし、また謳歌してきた女である。結婚前の海岸に暮らしていたころにはバーのホステスをやり、僻地に移り住んでもからも乗合馬車が通っていたころには「百二五通りのキスの仕方を知っている」と豪語していたように(272)、彼女は自分が女性であることを楽しんできた。それが、めったに人の訪れなく

なった僻地の暮らしで女性性を誇る相手も周囲にはいなくなり、たまに帰ってくる亭主は彼女の気持ちとは関係なく自分勝手に彼女に性の相手をさせる。そして彼女の容貌も衰え、度重なる流産と授乳の困難、そして発育の悪い子供しか産めなかったことから、彼女は母親として優秀でないことを証明し、彼女の女性としての誇りは大いに傷つけられた。たしかに彼女の苦労は彼女のなかで女性としての苦労という形をとって表われている。

これらの苦労を彼女はすべて夫にぶつけ、夫のせいにする。彼女が自分の心と顔を台無しにしたのは「何のため」と亭主にぶつけていることを考えるとき（273）、彼女は自分の不幸のすべての責任は亭主にあると考えており、彼女自身も自分が夫を殺した動機は亭主への不満にあると思いつこんでいる。一見すると、たしかに、女は自分と子供守るために夫を殺したと思える。

しかしながら、亭主への不満だけが、彼女の夫殺しの動機ではない。彼女が思いつこんでいるように、亭主への不満、つまり、亭主から自分を守ること、亭主へ復讐することなどが夫殺しの動機になっている。しかし、亭主を殺すことだけでは主人公の不満は解消されない。主人公が亭主への一番の不満として挙げている「自分を独りぼっちにする」という不満を解消することはなく、かえって逆効果である。それに、彼女の流産と乳の出ないことは亭主のせいというよりも、彼女の置かれた環境のせい、すなわち暑さと土埃の舞うこの土地での生活が大きく影響している。彼女の容姿の変化もこの土地の厳しい自然が大きく影響していると考えられる。確かに彼女の前歯がたたき折られているのは亭主の暴力によるものだろう。しかし、髪の毛も薄くなり、やせ細って「エプロンの下には棒切れとを針金しかないのかと思える」姿になったことは、この土地での厳しい生活が作用している。彼女の女性性を大きく破壊しているのは、この土地での生活である。この土地へ彼女を連れてきて、彼女に店を任せ彼女を独りぼっちにする亭主も原因となっているが、亭主よりも大きく彼女の女性性を破壊しているのはこの土地の環境である。

しかしながら、彼女がこの土地の厳しさを正しく認識しているとは思えない。この土地の厳しさはこの作品の冒頭から展開されているごとく、この作品においてかなり強調されている事柄である。

All that day the heat was terrible. The wind blew close to the ground –it rooted among the tussock grass –slithered along the road, so that the white pumice dust swirled in our faces—settled and sifted over us and was like a dry-skin itching for growth on our bodies. (Mansfield 267)

しかし彼女はこの土地の厳しさを認識し、その環境に適合するようには生きていない。それは、彼女がこの土地に真の意味で所属していないからであり、彼女の心がイギリスへ向いているからである。彼女はヨーロッパ、とくにイギリス中心主義の人間で、自分の所属をイギリスにしている。いわば、彼女は、Janet Wilsonの表現を借りれば（183）、ニュージーランドのこの土地に「間違って配置されてしまった」イギリス人である。そしてこのイギリス中心主義と現実のイギリスとはかけ離れた厳しい土地とが齟齬をきたし、知らず知らずのうちに彼女の中に混乱を募らせているのだ。その混乱は彼女を狂気にまで追いやり、それこそが彼女を夫殺しへと駆り立てている。

この土地がイギリスと異なることは、前述した冒頭の厳しい自然描写の中にもあらわされているが、店に着いた後、語り手の口から次のように語られる。

It was sunset. There is no twilight to our New Zealand days, but a curious half-hour when everything appears grotesque –it frightens—as though the savage spirit of the country walked abroad and sneered at what it saw. Sitting alone in the hideous room I grew afraid. (Mansfield 271)

黄昏のない、一切がグロテスクに見える瞬間があるこの土地において、風も温度も湿度も、すべての気候はイギリスと違っている。イギリスではPercy Bysshe Shelleyが詩に詠うヒバリの歌声も、この土地では「石筆を石板の上に走らせるような」声しか出さず（268）、草も木々もイギリスのものとは違っている。

しかし、女はこの土地において、あくまでも自分の所属をイギリスに置いている。語り手である「私」が馬の擦り傷に効く塗り薬を取りに入った奥の部屋の様子が、女のイギリス志向を示している。この部分はすぐ前の引用部、つまり、ニュージーランドの黄昏の無さの言及と同じパラグラフで展開され、イギリス志向とニュージーランドの風土との乖離が際立つように配置されている。

It was a large room, the walls plastered with old pages of English periodicals. Queen Victoria's Jubilee appeared to be the most recent number –a table with an ironing board and wash tub on it –some wooden forms –a black horsehair sofa, and some broken cane chairs pushed against the walls. The mantelpiece above the stove was draped in pink paper, further ornamented with dried grasses and ferns and a coloured print of Richard Seddon. (Mansfield 270)

壁にイギリスの雑誌の古いページが貼られ、イギリス生まれのニュージーランド首相Richard Seddon (1845-1906) の肖像が貼られていることは、女のニュージーランドとイギリスに対する姿勢、すなわち、ニュージーランドに暮らしても親の国に当たるイギリスを志向しイギリスに自分の所属を置いていることを示している。

しかし、このイギリスとは異なる土地において、特に、ニュージーランドの中でも自然の厳しくめったに人の来ない僻地においては、彼女のイギリス志向は彼女の心に齟齬をもたらす。この土地と彼女の意識とが合わないことは、語り手である「私」によってすぐさま気付かれる。「私」はこの土地の特徴と女の暮らしぶりの不調和を感じとり、次のように思う。

“Good Lord, what a life!” I thought. “Imagine being here day in, day out, with that rat of a child and a mangy dog. Imagine bothering about ironing –*mad*, of course she’s mad! Wonder how long she’s been here –wonder if I could get her to talk.” (Mansfield 271)

アイロンがけは同じく*Rhythm*に1912年9月に発表した“*How Pearl Button was Kidnapped*”においてパケハの生活ぶりや価値観を表し、マオリ族の自然に密着した生き方に対立するヨーロッパ文明の人工的な生き方や価値観の象徴となっているが、この作品においても、身だしなみを整えるという表面的な意味と同時にヨーロッパ文明に沿って生きる価値観を表している。語り手はこの誰も来ない僻地でこの価値観に沿って生きる生き方は「気が狂っている」と思うのである。語り手はイギリス志向とこの土地との乖離を敏感に感じ取る。

女の精神が異常になっていることは、女の子供から明らかである。子供は女に「生き写し」で(271)、女の分身の役を果たしている。子供は語り手たちの前で幾つか絵を描くが、その絵を見

た語り手は「疑いもなくその子供の精神は病的で」、「それは狂人の器用さで描いた狂人の絵である」と判断する（274）。女はあきらかに狂人としての部分を抱えている。そしてその狂気はこの土地とイギリス志向との乖離を認識することができないために、すなわち志向と現実とがかみ合わないためにもたらされたものであろう。女はこの土地についての感想も不満も一言も漏らすことなく、つまりこの土地の風土を、僻地であることを認識することなく、アイロンをかけ、スコーンを焼いて、お茶を飲み、イギリス式の暮らしを続ける。

しかし、女のほうは自分の不満がどこにあるのかに気付いていない。彼女はひたすら自分のその土地での生活の不満を、自分の女性としての苦勞と容姿の変貌を亭主のせいにする。そして、精神に異常をきたした女は、とうとう自分の不幸の原因と思い込んで亭主を殺してしまうのだ。もう一つの大きな不満、すなわち、この土地とイギリス志向との乖離がもたらす混乱を彼女は意識することはない。だから彼女は男が傍にいても同じ事を繰り返すであろう。Joeは女が少し変わっているのは独りで寂しすぎるからだと思っているが、慰めたとしても、女は正気には戻らない。女のもとに少しばかり居残ることにしたJoeは、亭主と同じ運命をたどる可能性も大きい。

ここには女の意識と語り手である「わたし」の認識のずれがある。マンスフィールドは女と語り手と二つの意識から店の女の肖像を立体的に描いている。亭主を殺すにあたって、どちらも動機となっていくが、マンスフィールドが強調しているのは、イギリスとは異なる土地に暮らしながらもイギリス志向でいるパケハの憐れである。

### Ⅲ “Millie”

次に“Millie”を見てみる。この作品はやはりニュージーランドの奥地で羊の農場経営をする夫とともに農場で暮らす女性のパケハ、Millieの話である。“A Woman at the Store”とは違って、Millieの周囲に何軒か農場があり、農場にも使用人がいて、人淋しいことはない。その日近所の農場で農場主がイギリスから見習いに来ていた若者に殺され、夫と使用人たちは近所の男たちと逃げた犯人を捜しに出かける。その留守の間、Millieは裏庭に若者が倒れているのを見つける。その若者は「まだ子供らしさの抜けきっていない」少年で、彼女はその少年を見たとき、その少年が犯人だと判っていながら、その少年に食べ物を作り、捕まらなければいいと願う。しかし、夜更けて、犯人が裏庭に潜んでいるのを知った夫と使用人たちが、逃げる犯人を追始めると、彼女は「狂気じみた喜びのなか、」その少年を「捕まえろ、」「銃で撃ってしまえ」と叫び、笑いながら踊りまわる。人間を狩って殺すという蛮行に狂喜するのである。

では、この蛮行に何故Millieは狂喜したのであろう。この疑問を解くことによってマンスフィールドのこの作品に寄せるメッセージを考えてみる。

その日Millieは今まで経験のしなかった二つの感情を湧きあがらせる。一つは母性愛であり、もう一つが蛮行にたいする狂喜である。まず、母性愛から見ると、その日彼女が裏庭の材木置き場に倒れている少年を見つけたとき、彼女の心に湧きあがったのは母性愛である。倒れている男が「まだ子供らしさの抜けきっていない、ブロンドの髪をして口元と顎にブロンドのうぶ毛がのびている」のを見て取ったMillieは（328）、その少年の顔や髪や喉を水に浸したエプロンのはしで拭いてやっているうちに、「これまで経験したことのない恐ろしい感情が」彼女の胸を捉



えるのを感じる。

A strange dreadful feeling gripped Mille Evan's bosom -some seed that had never flourished here, unfolded, and struck deep roots and burst into painful leaf. (Mansfield 328)

そして「子供が寝言を言うような小さな声で」その少年が「お腹がすいた」と言うと (329)、さっそく食べ物を持ってきて食べさせる。そしてその少年がみんなが探している犯人だと判った後でも、彼女は彼に食べ物を勧め、次のように思う。

She broke the bread and butter into little pieces, and she thought, "They won't ketch 'm. Not if I can 'elp it. Men is all beasts. I don' care wot 'e's done, or wot 'e 'asn't done. See 'im through, Millie Evams. 'E's nothing but a sick kid." (Mansfield 329)

さらに夜になって床に就いたあとでも、どうしても「あの子を逃がさなくてはならない」と思う (330)。彼女にとって正義などというものはどうでもよく、くだらなく、真相などというものははっきりしないものだと思われた。隣人が殺されたことを初めて耳にしたときには、追跡される犯人を「そんなやつを可哀想とも思わない」(327) と考えたにも拘わらずである。ここに芽生えた彼女の感情は母性愛に他ならない。

しかし彼女は自分に母性愛があるとは思っていなかった。彼女には子供がいらないが、彼女は「子供がいなくて淋しいと思ったことはない」(327)。夫のShidは淋しいと思っていると思うけれども、自分には子供を欲しいと思う気持ちや、可愛がりたいと思う気持ちはないと思っていた。彼女は自分に子供ができないことを考えないようにしている。彼女は子供が欲しいという気持ちを、自分の中の母性愛を目覚めさせることなく暮らして来た。それがその日犯人の少年を介抱することによって、一気に心の奥底から湧きあがり、花開いた。

では、何故彼女は自分の中の母性愛という自然な感情を目覚めさせなかったのであろうか。それは、何故彼女が蛮行に狂喜したかという疑問と密接にかかわっているのだが、彼女が日常において現実をしっかりと捉えることなく、自分の気持ちもしっかりと見据えることをせずにあいまいにしてきたからである。彼女は自分の暮らす土地が彼女を混乱させていることに気付かない。

彼女が抱く蛮行にたいする狂喜の気持ちは、彼女の暮らす土地と彼女の志向とが乖離しているために彼女が混乱していることから生じている。彼女の暮らしているニュージーランドの奥地の土地は、「髪の色が焼ける」ほど、「汗が顔を流れ、花や顎から垂れおちる」ほど暑く、遠くの道を行く馬の姿が「蛇のように踊って見える」土地で (326, 327)、およそイギリスとは違っている。

一見すると、彼女にイギリス志向はないように思える。彼女の寝室には「ウィンザー城の園遊会」の色刷りの版画が飾ってあるが、彼女はその絵を見て、絵に描かれている世界は好きではないと思う。

She flopped down on the side of the bed and stared at the coloured print on the wall opposite, "Garden Party at the Windsor Castle." In the foreground emerald laws planted with immense oak trees, and in their grateful shade, a muddle o ladies and gentlemen and parasols and little tables. The background was filled with the towers of Windsor Castle, flying three Union Jacks, and in the middle of the picture the old Queen, like a tea cosy with ahead on top of it. (Mansfield 327)

エメラルド色の芝生、巨大な樫木の木陰、ユニオン・ジャックの旗、ヴィクトリア女王、着飾っ

た紳士淑女たち、そして茶会、すべてイギリスを象徴するものばかりで、Millieの住む暑くて草地と埃っぽい道が彼方まで見渡せる土地とは正反対の風景である。Millieはこの絵を見て「こういうのは好きでないと」思う (327)。「あまりに偏りすぎているし、女王とかなんとかばっかりだ」と賛成しない (327)。

彼女が志向している世界は、彼女がSidと結婚した日に撮った写真に表わされている。クリーム色のカシミアの洋服にサテンのリボンを付けた彼女は籐椅子に座り、Sidは片手を彼女の肩において彼女の持っている花束を見て立っている。そしてその背景には次の風景が写っている。

And behind them there were some fern trees, and a waterfall, and Mount Cook in the distance, covered with snow. (Mansfield 327)

その写真に展開されているのは、写真館の書割を背景に撮られたニュージーランドで、その書割に描かれているニュージーランドは遠くに雪を頂いているマウントクックを聳えさせて、シダの木々と滝のある風景の世界である。彼女が暮らしている土地よりも、もっと水の豊かで気候も温暖で暮らしやすい土地のイメージである。彼女はこのニュージーランドのイメージにとらわれている。このイメージのニュージーランドとこの土地とは齟齬をきたしている。彼女の思い描くニュージーランドはあくまでも書割という絵にかいた餅であり、現実の彼女の「手が赤く腫れ」汗がしたたりおちる生活とは違っている (328)。

そして、この書割のニュージーランドのイメージは、イギリス人たちがイギリスで思い描くニュージーランドの風景、すなわち、イギリス人たちにとって移住し暮らしやすい理想郷としての風景に他ならない。もちろん、ヴィクトリア女王の絵を見て「本当にあんなふうをしているのかしら」と思うところから、Millieはイギリスにいたことはなく、つまり、イギリスから移住してきた植民者ではなく、親か祖父母の代で移住してきた植民者であろう。イギリス人の描くニュージーランドの風景に囚われている彼女は意識の表層ではイギリスを志向していないと思っているものの、やはり間接的にはイギリス志向であると言える。

彼女に母性愛を生じさせるのは、イギリスの少年である。マンスフィールドが少年をイギリス人にしたのは、Millieの中にイギリスを愛する気持ちがあることを教えている。彼女は気づいていないが、自然な感情にしたがえば、彼女はイギリス志向である。もちろん、隣人の農場主を殺したのはイギリス人の少年であり、作品の前半部ではイギリスはマイナスのイメージで捉えられている。それにニュージーランドの農場経営を習いに来ている点において、ニュージーランドはイギリスよりも優位に立っている。しかし、Millieにとってイギリスは彼女に欠けていたものを充足させてくれ、そして彼女を自然な状態に戻してくれるプラスの働きをする。

そしてイギリス志向、つまりイギリス人の描く理想のニュージーランド像とこの土地での現実の暮らしに齟齬をきたしているために、知らぬ間に彼女は混乱し、母性愛への感情を麻痺させている。しかし、その母性愛がやっと意識の表層へ湧きあがってきた矢先に、彼女のなかに新たな、そして母性愛よりももっと強く、母性愛を圧倒してしまう感情が湧きあがる。人間を狩りで殺すという喜びである。

And at the sight of Harrison in the distance, and the three men hot after, strange mad joy smothered everything else. She rushed into the road—she laughed and shrieked and danced in the dust, jiggling the lantern. “A -ah! Arter ‘m, Sid! A - a -a—a—h! Ketch ‘im,

Willie. Go it! Go it! A –ah, Sid! Shoot 'im down. Shoot 'im! (Mansfield 330)

この狂喜は、まさに狂気であり、病的なというより、闘争本能に駆りたてられた者の陶醉に近い。この攻撃的な狂気は、心に混乱が生じていたものの、それを意識下に追いやって無視していたために鬱積して煮詰まり、他の者たちが人を狩っている現場を見たことを契機に、残虐行為の悦楽という形で一気に噴き出してきたものである。マンスフィールドは母性愛よりも残虐な悦楽という狂気のほうが強いと考えている。

この作品においてマンスフィールドは植民者の精神的な立ち位置に関してイギリスとニュージーランドの複雑な関係を浮かび上がらせる。しかし焦点はあくまでもイギリス志向と自分の暮らしている土地との齟齬に混乱している主人公の姿である。

#### IV 植民地出身者としてのマンスフィールド

以上みてきたように、“A Woman at the Store”と“Millie”にはイギリス志向と植民地の現実の生活との齟齬に混乱する主人公の姿が描かれている。どちらの作品にも物語の設定に厳しい自然の僻地が選ばれているが、それはニュージーランドの厳しい環境を訴えるためではなく、異なる環境において猶も、本国を志向する植民地民の哀れさと虚しさを描くことが目的であることが解る。

しかしマンスフィールドはどのようにイギリス志向を哀れと捉えるのであろう。1903年1月イギリスへ向かい、ロンドンのクウィーンズ・カレッジに留学した後、1906年暮れ無理やりニュージーランドに連れ戻された彼女は、イギリスこそ文化の中心であると考え、イギリスに戻りたくてたまらなかった。そしてやっと父親を説き伏せて1908年8月にイギリスに再度わたり、イギリスで暮らす望みを叶えた。彼女の中にはイギリス志向が存在していたはずである。

しかしながら、再渡英した後の彼女のノートブックや手紙にはイギリスを嫌う内容が次々と綴られる。たとえば、1921年2月9日の手紙では、“I shall never live in England again. I recognize Englands admirable qualities, but we simply don't get on. We have nothing to say to each other, we are always meeting as strangers” (O'Sullivan and Scott 1996: 178). また、1921年7月25日の手紙では、“How I have hated England! Never, never will I live there. It's a kind of negation to me and there is always a kind of silky web or net of complications spread to catch one” (O'Sullivan and Scott 1996: 255). さらに、1920年5月初旬の手紙では、“It is dreadful to be England again. …It is simply tragic to meet this reluctant painful England again” (O'Sullivan and Scott 1996: 7). と彼女は言っている。

このようなイギリスにたいする毛嫌いの根底には、本国で彼女が受けた植民地出身者としての差別があろう。彼女は自分が植民地出身者であることを、イギリス人ではないことを意識せずにはいられない。1919年5月のノートブックには次のように彼女の植民地出身者としての肩身の狭さが綴られている。

I am the little colonial walking in the London garden patch –allowed to look, perhaps, but not to linger. If I lie on the grass they positively shout at me: “Look at her, lying on our grass, pretending she lives here, pretending this is her garden, and that tall back of the



house, with the windows open and the coloured curtains lifting, is her house. She is a stranger –an alien. (*Notebook II*: 166)

彼女はイギリスにおいて自分が「よそ者」であり、「外国人」にすぎないことをひしと感じている。彼女はイギリス人たちの「私たち」(our)の仲間に入らず、彼女のほうもイギリス人たちを「彼ら」(they)として捉えるほかはない。

このよそ者意識は再渡英した後、早くから感じていたと思われる。1909年から滞在したドイツのバイエルン地方での体験をもとにした短編(1910年O. A. Orageの*the New Age*に発表、のちに1911年*In a German Pension*に収録)において主人公の「私」は周囲の人々に自分がニュージーランド人であることを知らせることはなく、またイギリス人でないことを知らせることもなく、<sup>8)</sup>国籍不明の状態になっているが、これはマンスフィールドが国籍という問題に、つまり自分が植民地出身だということにかなり神経質になっていることを教える。

したがって、自分がイギリスにとってのよそ者であると意識する者にとって、イギリス人の仲間には入れないと感じる者にとって、イギリス志向を抱えることは、馬鹿らしい。哀れであり、虚しい。その視点から“A Woman at the Store”と“Millie”は描かれている。この二つの作品はニュージーランドに暮らしながらイギリス志向を抱くパケハの虚しさを取り上げ、我知らずにせよ、環境が合わないにもかかわらず本国を志向することによって精神的混乱を生じ、それがその植民者を狂気に、そして蛮行へと駆り立てる姿を描いている。

そして*Rhythm*と出会ったマンスフィールドは、どんどん*Rhythm*とのかかわりを深めていく。Gerri Kimberの言うように、*Rhythm*には多くの移住者や外国の通信員が寄稿しており、はじめから「国家を超えたアイデンティティ」(transnational identity)があった(15)。イギリスからはじき出されていると感じていたマンスフィールドが、そこに居場所を見つけるのは当然のことであった。彼女は国家、民族を超えた雑誌と関わることによって、自分も国家、国民を超えた存在としてのアイデンティティを持つようになる。言い換えれば、彼女は自分が、Angela Smithの言うところの「自発的な異郷生活者」(voluntary exile)としての認識を持つようになる(78)。一つの国に所属しこだわることや一国を志向することを彼女は意味がないと考えるようになる。彼女がニュージーランドを懐かしく思い出し描きたいと思うようになるのは、<sup>9)</sup>弟のLeslieが彼女のもとを訪ねてきて、第一次大戦の演習事故で亡くなった後の1915年10月以降のことである。その時、彼女にとってニュージーランドは幸せだったころの懐かしい思い出の場所、つまり、牧歌的で穏やかな理想郷へと生まれ変わっている。

## V まとめ

以上のことを考え合わせるなら、マンスフィールドはパケハのイギリス志向と現実の齟齬を大きく明確にするために、ニュージーランドのなかでも厳しい自然の土地を背景に選んだことが解る。ウェリントンの町の暮らしでは、その齟齬は大きくくっきりと出ないであろう。彼女はイギリス志向の虚しさを際だたせるために、厳しい生活環境の土地を描いたのだ。

また、厳しい自然環境の中で主人公の女性が女性として、とくに母親として苦勞する姿や、母親になれない姿が描かれていることは注目に値する。マンスフィールドは厳しい生活環境の中に

においては必ずしも女性は自分の性を全うできないと考えている。やはり女性性はある程度守られていないと全うできないと思っている。このことは、“Prelude”や“At the Bay”における Linda Burnellの逃避願望を抱えながら出産を重ねる人生を思い起こさせる。もし願望どおり世界の冒険の旅にでていたら、Lindaは結婚することも子供を産むことはなく、女性としての性を全うすることはなかっただろう。彼女は女性としてではなく人として人生を楽しんだであろう。しかし、現実には、その願望とは裏腹に彼女は結婚し安全で快適な家庭空間に暮し、次々と出産し、子供を増やし続ける。マンスフィールドは女性が女性としての性を満喫し、無事に出産・子育てをするためには安全で快適な空間が必要であると考えている。

## 註

- 1) *Rhythm*は1911年夏John Middleton Murry が編集長となり、友人のMichael Sadler, Frederick Good-year, 及びJohn Duncan Fergusonと創刊。Mansfieldは1912年4月に“A Woman at the Store”でデビューする。ほどなくMansfieldはこの雑誌のassistant editorになる。
- 2) *Blue Review*は*Rhythm*廃刊後、同じ趣旨のもとMurryとMansfieldが*Blue Review*と名前を変えて1913年5月から7月まで発行した雑誌。
- 3) “A Woman at the Store”の背景となっているニュージーランドの奥地は、Mansfieldが1907年の11月から12月にかけて北島の奥地をキャンピング・ツアーしたときの経験を材料としている。この時の旅はThe Urewara Notebookとして*Notebooks*のなかに記録されている。
- 4) *Rhythm*に発表されたとき、男性の登場人物の名前はJoe to Hinであったが、Constableの短編集に収録するときHinの名前はGeorgeに変更されている。
- 5) パケハ（pakeha）とは、ニュージーランドでマオリ族以外の白人、特に祖先がイギリスから移住してきた者をいう。
- 6) *Rhythm*の創刊号においてMichael Sadlerが“Before art can be human it must learn to be brutal” (36) と言っていることから、brutalであることは、この雑誌が目指した一つの目標になっている。
- 7) この論文で扱う“A Woman at the Store”と“Millie”はKimber, Gerri and Vincent O’Sullivan. (eds) (2012), *The Collected Fiction of Katherine Mansfield, 1898-1915*. Edinburgh : Edinburgh UP. による。
- 8) たとえば、“The Luftbad”でドイツのバイエルン地方で療養中の主人公の「私」は、他のお客から“Are you an American?”と聞かれると“No”と言い、“Then you are English woman?”と聞かれると、“Hardly”と言って、自分の出身地を明かさずに誤魔化している（Mansfield 177）。
- 9) Notebook 45に“Now—now I want to write recollections of my own country. Yes I want to write about my own country until I simply exhaust my store –not only because it is a ‘sacred debt’ that I pay to my county because my brother & I were born there, but also because in my thoughts I range with him over all the remembered places. I am never far away from them. I long to renew them in writing (*Notebooks* II: 32) と書いている。

## Works Cited

- Kimber, Gerri. “Mansfield, *Rhythm* and the Émigré Connection” in Janet Wilson, Gerri Kimber and Susan Reid (eds.), pp.13-29.
- Kimber, Gerri and Janet Wilson (eds.) (2011). *Celebrating Katherine Mansfield: A Centenary Volume of Essays*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Kimber, Gerri and Vincent O’Sullivan. (eds.) (2012), *The Collected Fiction of Katherine Mansfield, 1898-1915*. Edinburgh : Edinburgh UP.

- O'Sullivan, Vincent and Scott Margaret. (eds.) (1984-2008), *The Collected Letters of Katherine Mansfield*, 5 vols. Oxford: Clarendon Press, vol.4 (1996).
- Sadler, Michael. "Aims and Ideals." *Rhythm* 1 (1): 36.
- Scott, Margaret. (ed.) (1997,) *The Katherine Mansfield Notebooks*, 2 vols. Canterbury: Lincoln UP.
- Smith Angela. (2000), *Katherine Mansfield: A Literary Life*. Basingstoke: Palgrave.
- Wilson, Janet. "Where is Katherine?": Longing and (un) longing in the Works of Katherine Mansfield" in Gerri Kimber and Janet Wilson (eds.), pp. 175-188.
- Wilson, Janet, Gerri Kimber and Susan Reid (eds.) (2011), *Katherine Mansfield and Literary Modernism*. London and New York: Continuum Publishing Company.